

# 「環境に浸ることで反転する主体」論文要旨

東京藝術大学大学院美術研究科  
博士後期課程美術専攻油画研究領域 壁画  
1320906 渡邊慎二郎

本論文は、植物との相互作用を通じて、主体と環境の『浸り』による新たなコミュニケーションを作品制作を通じて、環境との相互作用が主客の境界を往来できる可能性を探り、現代人における意識と環境の関係性を再考する事が目的となる。

人間は主に言語によってコミュニケーションを行っている。それは文字を使って、意味や言語を伝えている、動物は、音声を使って意思疎通を図っている。植物は、どのような行為を通じてコミュニケーションをとれるのかを模索しています。それは、感じる事、見る事、触れる事、加工すること、食べる事、様々な方法を通して、植物と対話を行っています。言語という記号にコミュニケーションを依存してしまうということは、精神や体感を巡る感覚を蔑ろにする状況が続いているように感じる。再現性のないものに価値を感じる事が難しくなり、主体が感じる世界を押し殺してしまうことが少なくない。このような状況において、世界との「開かれ」を感じながら生きていくためには、自分の持つ身体や精神すべてを用いた他者とのやり取りが作品となり、それによって主客の往来のゲートウェイを示すことができると思っている。自分の身体環境に意識を合わせながら何に包まれ、相互に生きているかを再認識するために作品を制作します。

論題にもある「浸る」という行為が必要とされるのは、浸ることによって外部の環境と内なる感覚が相互に浸透し合い、主体と環境の境界が曖昧になり、能動的に影響し合う関係が生まれる。浸ることで、単なる言語による理解を超えて、身体と精神が一体となり、より深いレベルでのコミュニケーションが可能になるのである。これにより、現代社会で失われつつある感覚や意識を取り戻し、新たな価値を見出すことができる。

制作意義として、「環境に浸ることで反転する主体」となることは、自己と他者を横断した知覚を明示する、すなわち、人間中心主義から逸脱し、自然や他の生物との共生関係を深める新たな表現のあり方であると言える。この経験を通じて、私たちは、人間が自然界における一存在であることを再認識し、他の生物への共感を育むことができる。脱人間主義的な視点から、人間は自然の一部であり、他の生命体と不可分の関係にあることを理解することで、人間を人間としてより深く見つめ直す機会を得られる。つまり、人間中心主義的な価値観から脱却し、多様な生命体との共生を模索する新たな人間像を提示することが可能になる。植物を他者として認め、客体化しなくなれば、人間という他者もまた同じ種ではありつつも他者としての違いを認められるきっかけになると思っています。

植物を通じて環境と対話することで、私の意識や身体がどのように変化し、その変化がどのように作品に反映されるのかを本論文で記述していこうと思います。

本論文では、異なる環境で植物とコミュニケーションを行い様々なメディアで表現してきた行為と表象を身体環境と照らし合わせ、浮き出てきた感覚を根拠を明示したうえで分析を行っていく。しかし作品制作において自分の「他者」への感覚は、その都度環境によって更新されてゆくため、作品の時系列に伴って論述していくものとする。

本論は全6章からなる。

第1章では、私の環境への認識を確認し、「浸る」ことの定義づけを論じる。第2章では、「生活環境」において「他者」の存在について論じる。生活空間という環境でもあり自身の体内のような空間において、「他者」が同居している事への気づきと、繋がりについて考察する。第3章では、「都市環境」という街の中で「動的」、「静的」のキーワードから、人間と植物の境界について思考していく。第4章では、自然環境に「浸る」ことで他者との相互作用を探り、植物や鉱物の「気配」を感じる体験を通じて、主体の反転を考察する。第5章では、植物と人間の間を生み出す作品を通じて、自然と人間の関係性を探る。第6章では、これらの考察を総括し、「環境に浸る事で反転する主体」に関する芸術的な展望を示す。